2025 年3月23日 受難節第3主日礼拝メッセージ

「神の力は底辺から」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 16 章 13−28 節

まだまだ寒いなと思っていましたが、一昨日と昨日と急に暖かくなって、よい天気に恵まれた中、無事にいくつもの保育園で卒園式が行われました。一張羅に身を包んだ子どもたちとそのご家族が、笑顔で登園して来られて、記念写真を撮影されていました。また卒園式の中では、一人一人の子どもたちの成長を語る担任保育士の言葉に、涙を浮かべている保護者の姿も多く見られました。その他にも、子どもたちはいつものように元気に駆け回り、大きな声で笑い合い、また卒園後、小学校に上がってからの夢や、将来の夢なども語ってくれました。そのような屈託のない、無邪気な子どもたちの姿からは、まさに命が輝きあふれ出ていましたし、たくさんの元気をもらいました。

大喜びで保育園を巣立っていく子どもたちを見送ることが出来るのは、そこに携わる大人たちにとって、大きな喜びです。また、子どもたちのこれからにおける無事や幸せを願わずにはいられません。そのように思う一方で、「先生大好き、お友だち大好き、保育園大好き、お家の人たち大好き」と言ってくれて、これまでにいっぱい「大切にされた」という経験と思い出をたくさん持って、「この世界はすばらしい。温かくて、生きていて嬉しい」と感じてくれているその思いが、これから先も、小学校へ行っても、中学校や高校に行っても、それから先、大人になっても、ずっと変わらずに彼らの心の中にあり続けて欲しいとも、願わずにはいられませんでした。なぜなら、小学校、中学校、高校と、大きくなるにつれて、子どもたちを取り巻く環境は厳しくなっていくからです。

学習や勉強一つをとっても、「何のために学ぶのか」と言った時に、本来の動機は「もっと知りたいから」という単純な知的好奇心、自分の内側から自然と生じて来る感情や願望であったはずです。保育園の子どもたちが、電車であったり、昆虫であったり、恐竜であったり、興味のあることにのめり込んでいって深く学び、驚くべき速度で吸収し続けるのは、まさにそのためだと言えます。それがいつの頃からか、「勉強は嫌でもしなければならないもの」になってしまいます。なぜなら「勉強しないと、将来困るから」と大人たちから言われるからです。「勉強しなくて困ること」とは一体どのようなことでしょうか。小中学校の義務教育を終えた後の進路選択の選択肢が少なくなる、ということでしょうか。いわゆる「いい学校」に進めなくなる、ということでしょうか。そもそも「いい学校」って、「成績のいい学校」のことなのでしょうか。どうなのでしょうか。

そもそも日本では、どこまで学校に行き、何の資格を取るか、どこの学校を出る

かで、就職に差が付きます。一生のうちにどれだけの金額を稼ぐか、「生涯賃金」という観点から見れば、何倍もの差、それこそ 40 年間働いての収入が 1 億円から 10 数億円まで、10 倍以上の差が付くことも珍しくありません。かつて「一億総中流」という言葉が聞かれたような中間層が分厚かった時代には、その事実に目を向ける人は少なかったかもしれませんが、近代国家としての日本社会はずっと、格差社会であり、学歴差別社会でした。言葉を換えれば、その人がどのような学校教育を経るかによって、「他人を使う人になるか、他人から使われる人になるか」、もしくは「他人を踏む側に立つか、他人から踏まれる側に立つか」ということが決まって来ているのだと思います。

立派な経歴と学歴を持つ官僚が不都合な事実を隠蔽し、人々の信頼を得て選挙で選ばれたはずの政治家が平気で嘘をつき、公約を反故にして、他人を傷つける。多額の税金を投入する公共事業も、相場や入札は形だけで、実態は一部の利権企業による中抜きがまかり通っている……。来月の開幕まで、あと 3 週間となった大阪万博は、その際たるものでしょう。民意を無視して、膨張し続ける予算。もはや開幕まで間に合わない工事。安全対策に対する説明すら未だに十分ではありません。その結果が、前売りチケットが全然売れていない、そもそも関心が持たれていない、という今の状況になっています。「いのち輝く未来社会のデザイン」とか、「持続可能な開発目標（SDGs）達成への貢献」とか、様々な謳い文句だけが空しく飛び交っていますが、現実はもはや大赤字と大量の環境破壊、環境汚染が確定しています。そのツケは、一体誰が払うと言うのでしょうか。振り返ってみれば、福島の第一原子力発電所の核事故も、熊本の水俣病も、その有害物質の後始末の問題は未だに何も解決していません。「どうしようもない」から、とりあえず「臭い物には蓋」をして、目を逸らして先送りという現状です。そのような社会は、本当に「美しい素晴らしい世界、温かくて生きていて嬉しい世界」と言えるでしょうか。それが本当に、人々が一生懸命に勉強や学習を重ね、一流とされる教育を受けて来た末の結論なのだとしたら、私たちはどこかで一番大切なもの、心や魂というものを、無くしてしまっているのではないかと思います。

今回の聖書のお話の中にも、そのようなイエス様の言葉がありました。「マタイによる福音書」16 章 25−26 節です。「[25] 自分の命を救おうと思う者は、それを失い、私のために命を失う者は、それを得る。[26] たとえ人が全世界を手に入れても、自分の命を損なうなら、何の得があろうか。人はどんな代価を払って、その命を買い戻すことができようか」……。聖書の中には「命」を表す言葉が、いくつかありますが、実はここで「命」と訳されている言葉（プシケー）は、他の箇所で「永遠の『命』」などと語られる際に使われている言葉（ゾーエー）とは異なっています。こ

こで「命」と訳されている言葉（プシケー）は、「命」と言うよりも、むしろ「自分自身」という意味だと考えられます。そのようにして、再び 26 節を読むと、次のようになります。「人がたとえ全世界を手に入れたとしても、自分自身をダメにしてしまうなら、何の意味があろうか。人には自分自身に代わる値打ちのあるものが、何かあるだろうか」（本田哲郎訳参照）……。別の言い方をすれば、「命（プシケー）」は自分の「本心」や「魂」と言った方が、分かりやすいかもしれません。例えば、何かの取引や商売において、一見、条件が良さそうに見えても、「どうしてもやりたくない」「引き受けられない」、「決して譲ることのできない条件がある」時に、「そんな魂を売るようなことは出来ない」と言うセリフがあるかと思います。自分が一番大切にしているもの、命、魂、自分自身……。それがここでも表されています。

そもそも、イエス様ご自身も、自分の身体の命にはこだわってはおらず、むしろ自分自身に与えられた使命のために、その生涯を用いられました。今回の聖書のお話もこれから来る自身の受難を予告するお話でした。もし単純に「自分の身体の命が何より大切。それを失ったら、たとえ全世界を手に入れても、何も出来ないし意味がない」というような意味のお話を語っておられたのだとしたら、「このままエルサレムに行けば殺されるかもしれない」と身の危険を感じた時点で、反対者たちから逃げて、隠れるはずです。にも拘らず、イエス様はそのようにはされませんでした。「自分はこの後、権力者たちによって捕らえられ、殺されることになるかもしれない」と語りながら、イエス様はその後、実際にエルサレムへ行き、そこで十字架にかけられて行きました。それは、それが自身の使命として、時に迷い、苦しみもだえながらも、心から確信して決して譲れない道だったからでしょう。一番大切なものは、表舞台で大勢の人々の目に留まり、称賛を浴びるようなものではなく、決して目立たず、むしろ多くの人からは望まれず、忌避されるようなものの中にあるのかもしれません。

前半の「ペトロの信仰告白」についても、同様です。16 節で「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰告白をしたペトロに対して、イエス様は 18 節 19 節で「あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てよう」「私はあなたに天の国の鍵を授ける」と言われました。このことから、ペトロはイエス様から特別の権威、力を与えられた第一の使徒であり、その権威が代々継承されて現代のローマ教皇にも継承されていると、ローマ・カトリック教会では考えられています。しかし、聖書のこの箇所のみからペトロを特別視するのは、やはり歴史のイエス様の見方ではないはずです。当のペトロは、イエス様のことを「メシア（救い主・キリスト）」と見抜いて、「バルヨナ・シモン、あなたは幸いだ」（16－17 節）とイエス様から褒められている一方では、22 節以降では叱責されています。

そもそも 22 節で、受難を予告するイエス様をペトロが「いさめた」とありますが、この「いさめる」というギリシャ語の元の意味は「叱りつけた」ですから、ペトロがイエス様のことを「何とんでもないことを言っているんですか。そんなことを言ってもいいとでも思っているんですか」と叱りつけたわけです。そのために、今度は続けてイエス様から「サタン、引き下がれ。あなたは私の邪魔をする者だ。神のことを思わず、人のことを思っている」と言われてしまいました。挙句の果てには、彼は、この後イエス様が、受難の道を進んで行った先で、イエス様が反対者たちによって逮捕された際には、イエス様のことを「あんな奴は知らない、自分は無関係だ」と言ってしまいました（マタイ 26：69−75 並行）。

「ペトロ」というのは、シモンに付けられた「岩」という意味の「あだ名」です。これはアラム語「ケファ」のギリシア語訳だと言われていますが、18 節にある「私はこの岩の上に私の教会を建てよう」という言葉が、そのまま「ペトロ」ということではありません。「この岩の上に」と訳されている 18 節の言葉は、地面にごろごろ転がっているような「石ころ」である「ペトロ」ではなく、もっと大きな岩の塊、それこそ地面を深く掘り下げて出てくる岩盤を表す「ペトラ」という言葉です。ですからここで歴史の中のイエス様が伝えられたことは、「教会というものは地上に高くそびえ立つ、きらびやかな建物ではなく、地面を掘り下げた低み、社会の底辺にこそ建つものだ」ということだったのではないかと思います。

神の力はどこに働くか。私たちは神様とどこで出会うのか……。この現実社会の中で、健康に恵まれ、仕事があり、収入が豊かで、周囲の人々からも認められるような社会的地位があり、住んでいる家や日々の食事が豪勢であることが、神様から豊かに祝福されているということなのでしょうか。この社会で認められ、素晴らしいと称賛されること、目に見える形で評価される道を順風満帆に進んで行った先にあるのが、実は周囲の他人を踏み付け傷つけるだけではなく、肝心の自分自身そのもの（プシケー）からも目を背け、本心を隠蔽し封印して、魂を傷つけているような生き方なのだとすれば、そこには本当に救いがないのではないでしょうか。

神の力が働くのは、目に見える石が幾つも転がっている地表ではなく、一人一人の内面を深く掘り下げた岩盤のある所、魂のある所であり、またこの社会の中で多くの評価や称賛の得られる高い所ではなく、むしろ人々から見放されたような、見向きもされない忘れられた底辺です。それでもそこから、いやそれだからこそ、そこから私たちは「この世界は美しく、温かく、生きていて素晴らしい世界」だと、声を上げ、身をもって示す歩みへと、今日も神様と共にあって導かれて行きます。